主日礼拝説教要旨　　　　　　　　　　　　　　　　　　2014年２月１６日

**「しかし、わたしの願いではなく」**

新約聖書ルカによる福音書第２２章３９－５３節

オリブ山の中腹には、今でもありますがオリーブが植えられた園で、ゲツセマネ(油しぼり)の園と言われ場所があります。エルサレムの街中は狭く、ひとり静まって祈る場所がなかったのでしょう。ある方によってこの園が祈りの場所として提供され、主イエスはそこをいつもの祈りの場とされました。エルサレムに入城されて1週間は過ぎていませんが、主イエスはいつものように祈りに行かれました。当時のユダヤ人は朝昼夜の祈りをしました。しかし、この祈りは、習慣としての祈り以上の意味を持ちます。主イエスは祈らないではいられなかったのです。この祈りこそ、世界中の救いがかかった祈りであり、世界の人々の救いを左右する祈りの時間でした。汗が血の滴りのように落ち、苦しみもだえて祈られ、切に祈り続けられた。祈りの戦い、それがここで戦われたのです。

オリブ山についてから弟子たちに「誘惑に陥らないように祈りなさい。」と言われました。もともとの言葉は誘惑に「入る」です。「陥る」では思わぬ落とし穴に落ちて堕落する感じですが、誘惑に「入る」となると、声をかけて誘惑に引き込もうとする力があることと、自分から誘惑される領域に入って行く姿を描き出します。誘惑はあなたがたを引っ張るが、引っ張られてもスルスルと「入って」いかないように祈れ。そう主イエスは言われたのです。ハイデルベルク信仰問答では「人間の中にある悪に向かう傾き」を語ります。人間にとって誘惑は心地よく、魅力的で、入り込みやすいのです。だから主は祈れと言われました。それから石を投げて届く距離、講壇と会衆席の真ん中ぐらいの距離でしょうか、祈りに専念されるために弟子たちと離れて、おひとりになりました。当時、男性は立って両手を天に挙げて祈りしました。しかし主は、迫る十字架の重圧に押しつぶされるかのように、父なる神のみ前にひざまずいて、くず折れて祈られました。

「父よ」。神をこう呼べるのは、神の子である主イエスだけです。しかしわたしたちも、主イエスによって、「アバ父よと呼ぶ御子の霊」、聖霊が与えられています(ローマ書8章、ガラテヤ書4章)。「みこころならば」。父よあなたのみこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。「杯」とは詩篇23篇では「わたしの杯はあふれます」という豊かな祝福の杯ですが、ここでは十字架の苦難の杯です。十字架という苦難を飲まなければならないのですか。もし、みこころならば、どうぞこの十字架という苦難の杯をわたくしからとりのけてください。みこころならば。しかし、わたしの思いではなく、みこころがなるようにしてください。神に裁かれる十字架の死の恐ろしさを誰よりも知っておられたのは、主イエス・キリストだけです。しかも十字架なしに罪の赦しはありません。

この祈りの方向はわたしたちの祈りとは違います。わたしたちの祈りは、わたしたちが聞き届けてほしいことを神の前にさしだします。自分のお祈りでも、また執り成しのお祈りでも、神様はお許しくださるし、主もわたしの名によって父なる神にお願いしなさいと言われました。主イエスもそう教えて下さいました。ですからわたしたちはそう祈ります。また祈祷会でも執り成しの祈りを祈ります。でもこの主イエス・キリストのお祈りは、わたしたちが神にお願いする、下から上への求めではないのです。むしろこの祈りは白紙です。みこころのままに、みこころのままに。杯を取り除けてほしい願いがありますが、わたしの思いではなくみこころのままにしてください。全くの白紙で、あなたがしてくださることに、わたくしは従いますと言う、父なる神に信頼し、おゆだねする祈りです。

牧師としていろいろな方からの相談を受けます。相談があると言う方のお話を聞くと、ほとんどがすでに自分の結論をお持ちで、それを牧師に説明し、牧師に追認して認め印を押してほしいような場合がほとんどです。牧師にただそのまま飲み込んでほしいような相談を受けます。わたくしは、それが神のみこころだったらね、としか言うことがない。でも同じように自分もそうしていることがある。神様、ああして下さい、こうして下さいと祈る。神さま、あれはまだでしょうか、という感じを持つ。こういう下から上への要求としての祈りではない。全く神のみこころを白紙で求め、神におゆだねして従いますという祈りです。

このお祈りが十字架のスタートです。十字架はここから始まります。みこころのままにしてください。それに従います。ここから十字架は始まっているのです。この祈りの戦いがどんなに激しかったか。父なる神は天使を送って主イエスを力づけられます。サタンは最高に激しく攻撃し、お前はお前を裏切った弟子たちのために死ぬことはない、むだだ、やめておけと、激しく誘惑しました。しかし主イエスは、父よ、みこころがなるようにしてください、と祈り続けました。主イエスの祈りを貫いている言葉、それが、「わたしの思いではなく、みこころが成るように」です。

この祈りが短い時間で終わった祈りではないことは、苦しみもだえて、ますます切に祈られた、ということから分かります。どのくらいの時間を祈られたのでしょうか。苦闘。祈りにおける激しい戦いが続きました。そして汗がにじんで、それがまるで血がしたたるかのように、地面にぽたぽた落ちました。このときこそ、本当の救いがこの地上になされるかどうかを決める、決定的な祈りの時間であったことは間違いありません。そして主イエス・キリストはここで、ああ、私が十字架に向かって行くことは、父のみこころなのだ。わたしは父のみこころの通りに生きてゆくことが、わたしの道なのだ、との確信を得られます。そして父のみこころが確信できた主イエスは、立ち上がられ、全くガラッと変わられます。

祈を終えて立ちあがられる。そして弟子たちの所へ行かれる。父なる神の御心が受け止められた主イエスは、弟子たちに「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らないように、入っていかないように、起きて祈っていなさい」といわれました。もうこれが弟子たちとの最後です。主が捕らえられ、弟子たちは主を見捨てて逃げてゆく。ひとりペテロが大祭司の邸宅までついてゆく。そのペテロも3回、イエスを知らない、という。誘惑に陥らないように祈れ、とは主イエスの十字架の直前に弟子たちに言われた言葉です。「あなた方の要求が通る祈りではなく、神の御心を求め従う祈りで生きて行きなさい。」これが最後の教えです。別れの言葉です。

主イエスが十字架にかけられたのは西暦30年ごろです。ネロ皇帝がローマを焼いて、その責任をキリスト者になすりつけて迫害を始めたのが西暦64年です。長い迫害が終えてキリスト教がローマの国教に認められたのが西暦313年のミラノの勅令。約250年、初代教会の人々から始まり、迫害の歴史を耐えてきました。なぜ耐えられたのでしょうか。主イエス・キリストを信じることは迫害されて死ぬことと同じような時代が長く続いた。しかし、信仰を捨てなかった。それは何かを祈ったら聞かれると言うだけの信仰ではない。神がおられること、そして主イエス・キリストの十字架を信じ受け入れることが神の御心なら、その十字架を信じ、みこころに従う生き方を彼らは生きようとしたのです。さまざまな誘惑が彼らにもあったでしょう。しかし彼らは入っていかなかった。それは、みこころを聞いてゆく主の祈りの姿勢が、彼らの中にも形作られていたからです。

弟子たちに言い終わらないうちに、ユダを先頭にして登って来る一団があります。ユダはどこで主が祈られるか分かっていました。ですから暗闇の中で、この人がイエスだと示すために、接吻をしようと主イエスに近づきました。接吻をしたのか、しなかったのかは、ルカは書いていませんが、近づいてきた。そのときに主イエスは、「ユダ、あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか」と言われました。人の子とはご自分をさす言葉です。そして接吻という言葉の語源は「友愛」と言う言葉です。フィラデルフィアという町の名前がありますが、語源が似ています。ユダが今しようとしている罪の中核を射抜いた言葉です。あなたは友愛のしるしである接吻でわたしを裏切り売り渡すのか。これは罪の本質を見抜かれた言葉です。祈りを終えて立ち上がられた主イエスの言葉は鋭く、全てを見抜かれています。そしてこうなることをご存知であるゆえ、堂々としておられます。

そばにいた人が、弟子かも知れませんが、祭司長の僕に切りつけて、僕の右の耳を切り落します。切りつけるほうも緊張から不確かな切り付け方で、切られる方もとっさによけた。それで右耳だけが切り落とされた。それを主は「それだけでやめなさい」と制止され、僕の耳に手を触れておいやしになりました。いつものように癒やしをなされる主イエス・キリスト。十字架を前にして、いま傷ついている人の傷に触れて、主イエス・キリストは十字架の目前の最後の癒やしを、いつものように愛をもって行われました。

また、自分にむかって来る祭司長、宮守がしら、長老たちに対しは、彼らは群衆を恐れて、群衆のいない夜の、オリブ山の、この場所で自分を捕らえようとしたことを、はっきり指摘されました。22章の2節に、「祭司長たちや律法学者たちは、どうかしてイエスを殺そうと計っていた。民衆を恐れていたからである。」と記されています。その通りに、主イエス・キリスト一人を捕まえるだけなのに、恐れがあるので、武器を準備して山に登ってきた。「あなたがたは、強盗にむかうように剣や棒を持って出てきたのか。 毎日あなたがたと一緒に宮にいた時には、わたしに手をかけなかった。」と。捕まえる彼らのほうが恐れていた。剣と棒は、恐れているから用意した彼らの恐れのしるしです。ここでも、捕まえられる主イエスのほうが堂々とされ、彼らの罪の本質、恐れの本質を見抜かれた言葉を語られました。どうしてわたしを神殿で捕まえなかったのか、と。

最後の言葉は鋭い言葉です。「だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」。祭司長たちや律法学者たちが支配する時代は、闇の時代です、しかし主は、父のみこころを受け止められて、全くの光が見えない闇の中を、進んでいかれます。オリブ山の祈りにより、この闇の中の道がみこころならば、何の光がなくても、闇が支配していても、父なる神が行くようにといわれるなら、わたしはそこを歩んでいく。捕まえる人々が恐れ、捕まえられる主イエスが堂々としておられる。みこころを知り得たからです。

わたしたちがこの地上の生活を終えるときに、みこころのままに生きられたという満足があれば、わたしたちは、どのような貧しさや乏しさや困難の中に生きていたとしても、満足してこの地上を去ることが出来るのではないでしょうか。毎週毎週の礼拝を通して、わたしたちは主のみこころに沿って生きることに尽きます。わたしたちはこの主の祈りによって、そして主が十字架に歩んで下さったことによって、救われた者です。神は強制的に何かをさせられる方ではありません。わたしたちはひざまずいて、祈って、主のみこころを聞き取って、その道を選び取って従ってくることを望んでおられます。信仰とは積極的な生き方です。わたしたちも祈りの中で、みこころを確信して、進んでいこうではありませんか。お祈りいたします。

恵み深い天の父なる神様。この大雪の中、兄弟姉妹を礼拝に導いてくださったことを感謝いたします。開会の祈りにありましたように、許されてここに集うことができました。ある方は、家を出ようとされて、何度も雪かきをされて、しかし出られなかった方もいます。集いたくても集えない方々からの連絡を受けました。どうか主よ、礼拝に集えなかった方々も、説教要約を読まれ、説教を聞くことを通じて、みこころに従って生きる思いを新たにしてください。この週も主のみこころに従って歩ませて下さいますように。主に信頼します。みこころが成るために、わたしたちをお用いください。みこころに従えたと言う喜びで日々を、人生を終えることができますように。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

ディボーションノート　７　　2014年２月１７日―2月２２日

|  |
| --- |
| ２月１７日(月)　詩篇１１７篇  　「詩篇」の中で一番短い歌です。わたしたちの願いも、全ての民が全ての国でまことの神を賛美することです。想像してみて下さい。世界中の人々が、ひとりの神を神とし、さまざまな偶像礼拝から解放されて本来の人間とされ、神を賛美している姿を。また主にある兄弟姉妹として、手を取り合って助け合っていける世界を。伝道者のパウロは海外宣教に献身した人ですが、自分の同胞の救いのためにも心を砕き続けた人でした。「実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない。」とまで、ローマ書9章3節で告白しています。神から受けることのできる大きな愛を、世界中の誰とでも賛美できるときが来ますように。 |
| ２月１８日(火)　詩篇１１８篇  　指揮者は「言え」と歌いかけます。会衆は「その慈しみは永久に絶えることがない。」と応答します。神を信じるから賛美が生まれると言うよりも、神こそが賛美そのもの、わが歌、救い、喜ばしい歌そのものです。信じることは賛美すること。「歌いつつ歩む」ことが信仰生涯です。右の手は力と権威を表わします。神は高く天に座しておられる方でしょうか。いいえ、神は地上に右の手を伸ばされ、み業を行われ行動される方です。生きて働かれる神は、人の目には捨てられたと見える役に立たない石を、土台の角の重要な石として下さいます。教会は立派な石だけで作られた建物ではなく、「しっかりと組み合わされ結び合わされ、部分は分に応じて働き、愛のうちに育てられていく」キリストの体です(エペソ4：16)。体の全ての器官が尊いように(第一コリント12章)、キリストの体である教会では誰一人、要らないと言われる人はいません。だから共に主に感謝しましょう。 |
| ２月１９日(水)　詩篇１１９篇  　「詩篇」の中で一番長い歌です。ヘブル語の22文字を冒頭に使い、8節ごとの連になっています。22文字×８節＝176節あります。最初の文字は(アレフ[א](http://ja.wikipedia.org/wiki/%D7%90))です。この最初の8節に119篇で繰り返される言葉が集中して登場します。道(信仰または信仰生涯)・おきて(律法)・あかし(みこころを示す生活規定)・さとし(従うべき規範)・さだめ(石に刻まれた言葉)・いましめ(生活規範)・おきて(公正な審判)などが、このあと繰り返し取り上げられます。神の言葉によって生きること、生かされることが信仰です。人間の経験が生み出した知恵も重要でしょう。しかし、たとえば苦難が来たときに、67節71節の言葉によって、苦難の意味が変わってきます。全く可能性がない事態でも、81節によって自分の中からではなく外から、神からの希望が与えられます。130節のように、闇に光を与え、万策尽き果てた時に知恵を与えてくれるのは、神の言葉です。 |
| ２月２０日(木)　詩篇１２０篇  　真実な言葉に生かされる人には、偽りの言葉や欺きの舌からでる言葉は、恐ろしい罠のようなものです。野蛮で粗野で残忍な人々が住む地、メセクとケダル。小アジアのメセク(今のトルコ中央部)か、ダマスコの南のケダル地方に住んでいた詩人。その心はいつも神の都エルサレムに向けられていました。この詩人は平安を求めましたが、そこに住む人々は戦いを好みました。神の助けがいつも必要だったのです。現代も偽りの言葉と欺きの舌が満ちています。息子のふりをして騙す話、なにかうまい話、汗しないで儲かる話、おだてて持ち上げる言葉には、恐ろしい罠が仕掛けられています。注意が必要です。憲法の解釈はわたしの責任でと野蛮な言葉を言い出すひと。神の前に深呼吸して、お祈りして、他の人にも相談して、それから対応する。彼らの戦いに巻き込まれ、罠に陥らないように、神の言葉を求めましょう。 |
| ２月２１日(金)　詩篇１２１篇  　冒頭の言葉は人々に愛された言葉です。讃美歌にも歌われています。山の彼方からくる何かの助けを期待するのではなく、天地万物を創造された神からの助けを待つのです。神は疲れて、まどろむことはなく、いつもわたしたちを守り保護して下さいます。太陽の強い日差しが人を打つだけでなく、月の異様な光が病気を起こし理性を狂わせると信じられていました。神はそこにも手を差し伸べて、旅する人々を守ってくださる方です。エルサレムの巡礼する人々が、この賛美を歌ったと言われます。旅の指導者が1－2節を歌いだし、巡礼者が3－4節を歌う。５－６節を指導者が歌い、7－8節を巡礼者が歌う。こうしてエルサレムの神殿を目指して旅を続けました。わたしたちの国籍は天にあり、天路を歩む礼拝者の一群がわたしたちです。共に賛美しましょう。 |
| ２月２２日(土)　詩篇１２２篇  　めざすエルサレムに到着した歌でしょうか。あるいは礼拝を終えて帰郷するときのうたでしょうか。エルサレムを讃える言葉に満ちています。聖書の信仰には、いわゆる本山のようなものはありません。わたしたちにとっては、エルサレムもバチカンも、名所旧跡の一つですが、信仰の本山ではありません。でもこの歌のように、教会を愛し、教会を慕う思いは大切にしたいと願います。清掃部の方々だけに教会堂の清掃を任せてはなりません。時間をとって清掃に加わり、キリストの体である教会を掃除し、きれいにし、美しくする。ここに集う人々が、平安と安全と神の愛とを受け止めることができるように。そして何よりも神を礼拝する場所として、わたしたちの思いを向ける場所でありたいと願います。 |